

大学放浪記（４）

伊藤信孝

マエジョ大学客員教授・再生可能エネルギー学部

本報では、大学の教員及び大学のランキングが、教員の論文数による評価基準でなされている事について記述する。筆者がタイの大学に赴任する前に耳にしたことは教員の研究姿勢、活動についての話しであるが、誰が、あるいはどの研究室が如何に研究をして居るか、またリードしているかと言う話しを耳に為た。その時の話としては、ある研究室ではアカデミックな雰囲気は部屋一杯に充ち満ちており、朝研究室に来ると、教職員も院生も学生も **[Good morning]** という代わりに、挨拶の言葉は「paper」というのが挨拶の標語になっていると言う。信じがたい言葉に懐疑的であったが一応心に留めておいた。しかし、やはり噂どおりではなく、流石にそこまでの状況ではなかったことがわかった。しかしそう言う噂が出るほどその研究室は学術活動に一同が頑張っていると言うことであろう。これまでいろいろな大学教員を見てきたが、アカデミックな雰囲気の中で着実に業績を上げている教員は極めて少ない。その結果が如実に表れているのはやはり教員の職階であろう。学部の仲でも教授のポストにある教員の数が圧倒的に少ない事もそれを物語っている典型的な例であろう。まともに研究に取り組んでいる教員の研究室には自ずと多くの学生が集まるし、毎日の日常生活も折り目正しく。朝早くから殆どの学生が研究室に来ており、引き締まった緊張感を感じさせる。学生の多くが指導して貰えない研究室よりも手取り足取り指導して貰える研究室を選ぶのは至極当たり前のことである。クラブ活動の顧問が自分の研究室の教授であったりすると、義理を感じてその指導下に入る学生もないわけではないが、学生の気持ちからすれば、やはり指導が行き届いた研究室を選ぶ（専攻する）のは無理からぬ事である。高額授業料を払って居るのだから同じ年数を掛け、一定のレベルの、また所要の量を学ぶのであればより幅広い知識を早く、正確に提供してくれる研究室が好まれるのは当然の成り行きである。もちろん研究は教えて貰うばかりを期待為ては十分な成果を得る保証にはならない。最低限、所定の課程を終えるだけの質と量を単位という形で取得することはできると思われるが・・・。

さて、研究業績は評価の高い学術誌に掲載された論文数で評価されるから、基本的に名の知れた学術に掲載された論文の総数が評価の要素のひとつである事は間違いが無い。しかし一方では、数ばかり多くても、果たして世の中にどれほど貢献したかとなるとそれはまた評価も見解も異なって来る。あるいは政治的な要素も入ったり、昇格・昇給などの人事なども絡む場合もある。しかしそれらはともかく刊行系為れた論文数が多いことが評価を高める、あるいはアカデミックなアクティビティを示す因子である事は事実であり、否定する事は出来ない。学生時代はとにかく所定の単位を取得して卒業、修了することが最低限必要・十分条件であるから、手取り足取り教えて貰える研究室に人気は殺到するのは

極めて自然である。少なくとも卒業というレベルはクリアできる。しかしその研究室に属する学生達が、研究の目的、社会への貢献度を考えて研究をして居るかとなると、それもまた別の問題である。いずれにしても上記為た人気の高い研究室では挨拶の標語が **Paper** と言う毎日の生活における挨拶の標語と聞いていたが、それはいささか誇張過ぎる噂話であった。もちろん毎年学部内で顕著な業績を上げた教員を表彰する制度があるが、その教員は殆ど表彰の対象として受賞しているのは間違いが無い。

教授でなくとも助教授でも助教でも同様に頑張っている教員も居る。しかしその数は少ないと言うのが筆者の感じである。前報でも記したが。タイの教員の多くは共同研究、協調するという事を決して心から好んでは居ない。それは他人と比較されることへの抵抗感、自らが持てる知識を取られるのではないかという不安、もしくは警戒感が働いているようである。一人では年間の学術誌への投稿掲載論文数を増すことは難しくなる。段々と自己閉鎖的に成り、同じ学会の中でもあまり他大学の教員を良く知らない状況に陥る。自分以外の人との接触、コミュニケーションが少なくなると、他の研究者がどのような研究をやっているかに疎くなる。自分のやっていること意外に興味を持たなくなる。独りよがりで見果として世の中から遅れた自分を見失うことになる。大学教員の年間論文数はどの程度かは定かではないが、論文投稿、学術誌への掲載がなければ表彰されることはない。このことは少なくとも研究らしい事をして居る大学教員は少なくとも **1** 編以上の論文を投稿、受理、掲載されていると言う事になる。自らが筆頭著者で、あるいは個人で論文数を増やすことは極めて難しい。余程忠実に動いてくれる相棒、または部下、あるいは院生、仲間などが居ないと継続為て毎年多くの論文を書き続けることはできない。そうした事を認識して居る筆者が最近耳にした驚きのニュースがあるので紹介する。その人にとって直接聞いた話では、その人は評価の高い学術誌に年間 **20** 編の論文を投稿、閲読を経て掲載されていると言う。もちろん国際学会で論文分発表為なくても論文投稿はできる。多くの学術刊行誌があり、オンラインでいつでも論文投稿は可能である。言うまでも無くインパクト・ファクタの高い学術誌となると自ずと選択肢は限られるが、逆に質的なものが問われる事になり、無事掲載されると逆に評価は高い。そうした環境の下で毎年継続的に多くの論運を投稿掲載するにはかなりの能力が無いと難しい。その人に依れば、国際学会を企画開催する場合の基調講演者の選考、招待講演者の招待には年間の参照論文数が **7000** から **8000**、時には **10,000** 編あるレベルの研究者を優先的に選ぶ事にして居ると言う。毎月送られてくる **ResearchGate** や **Linked-in** などで自分の研究（論文）がどの程度注目を浴びているかを知ることができるが、**1,000** を超える事はない。筆者の場合、研究論文の殆どがかなり昔のものであり、その時代は論文の電子投稿は殆ど無かった背景もあるが、桁の違いに舌を巻く驚きでもある。年間 **20** 編の論文投稿、閲読を経ての掲載はそれでも余りにも大きなショックである。論文巢（質については判断が難しく、学会賞や何某かの表彰を受賞している場合を除き、評価が分かれるから論文数が主たる評価の対象となる）。論文数は教員個人の昇級、昇格にかぎらず大学の人事にも大きく影響する。日本の大学でも大学院課

程の設置には、文科省から任命された審査員が課程設置を申請している大学の教員の業績審査を個々に行い、認定されないと申請課程の設置は認可されない、と言うよりは認可するにはそれに相当する資格が不十分と言うことで、更なる有資格者の補充や条件を満たす人材の配置などが指摘される。この段階で審査員の意見が大きな影響力を持つ。審査員とも成れば多くの弟子が全国に散在している。その中から人選して不足条件を満たす対応をする事が出来る。その審査には審査員の意向が大きく反映し、論文数が多少（あるいは多少どころか大幅な差があっても・・・）理由を付けて入れ込むことができる。論文数が評価の大きな要素である事は条件として考慮する必要があっても。審査する側からすれば、ややもすると自分の教え子を優先して採用する事が多いと言う批判がでてくる。記述したように年間 **20** 編もの掲載論文を有する若手教員が出てくると、事態は考え直さねば成らなくなる。何処まで改善されるか、あるいはどの様に改善するか関係機関の判断が注目される。極端に言えば審査する側（審査員）が年間数編の論文しか無いのに、若手教員の方がそれを上回る数の論文を掲載為ているとなると不平や不満、批判が高まるのは致しからぬ事である。一人の審査員が国の一地域の関係大学の専門領域を受け持ち、その任に当たる体制になって居る。審査員が一度得た権益を自ら放棄して、その座を降りることは少ないから年齢制限やその他の理由を付けての改善というところが落としどころではなかろうか。審査員の権限は課程新設における教員個人の審査にとどまらず、その教員の昇級、昇格にまで何某かの影響力を持つらしく、勢力に研究論文数を増している教員の昇格が遅れていると言う話も聞いた。いずれこの世界でもよく聞く話ではあるが、異論がない訳ではない。その代表的な意見の一つは、「ただ単に論文数が多いと言うのではなく、社会にどれだけ必要でその貢献度がどれほどか」と言う視点を考慮すべきというものである。論文のための論文（論文数を稼ぐのが目的で、社会にどれだけ有用で、社会的ニーズにどれだけ応えているかが不明）では評価も価値も低い。また審査員が一人で絶対的な権限を有すると言う点も考慮する余地があると言う意見が早晚出てくるのも容易に推測される。